196

中岳山麓古窯跡群（なかだけさんろくこようせきぐん）

（日置郡金峰町花瀬字荒平・獄山）

位置と環境

遺跡は，中岳（287.5m）の南西側に延びる舌状台地の崖端部に位置し，標高50m前後の台地に集中的に分布している。荒平古窯第１・第２支群，獄山古窯第１・第２支群，テンド堀古窯群を総称して中岳山麓古窯跡群としている。

調査の経緯

窯跡の多くは耕作や加世田大水害によって灰原・焼成口部分が破壊されているが，残存状態が良好な窯跡も数基ある。ほかにも古窯の存在が確認されており，中岳山麓には少なくとも100基を超える古窯跡が存在するものと推定される。

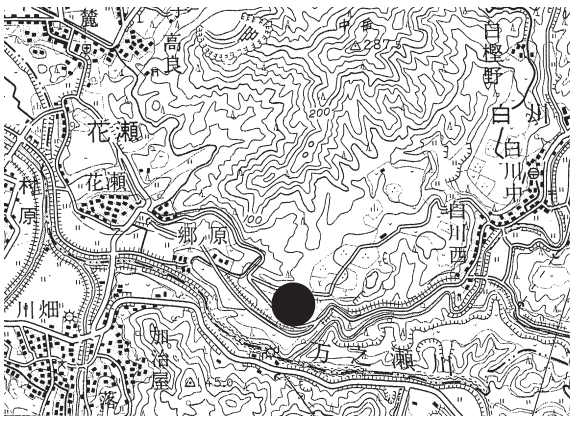
遺構と遺物

スサ入りの粘土塊・焼台・須恵器の散布状況，窯体の傾斜角度，高位立地，地形などから推して天井を作った半地下式構造の登り窯と推定される。①半地下式の無段登り窯。②土器棚は作りつけではなく，スサ入り粘土土塊を土器台として使用。③スサ入り粘土の支柱を用いている。④特定の器種を焼いている。⑤重ね焼きを行っている。⑥瓶形に近い広口形式の器形的特徴，叩きの種類などから９世紀代から10世紀代はじめに及ぶ時期のものであろう。日用雑器が主体である。

特徴

①底部同心円のタタキ，②穿孔須恵器，③胎土分析，④タタキの技法，⑤調整法（焼成・色調など），⑥器形などの須恵器製作技術の特徴は，熊本県荒尾市内の荒尾古窯跡群のものと共通点が多い。中岳山麓古窯跡群で須恵器を製作した工人は肥後から連れてこられ，阿多郡衙の管理下で須恵器製作に当たったものと考えられる。

中岳山麓古窯跡群で生産された須恵器は，薩摩地方では薩摩国府・国分寺遺跡，成岡・西ノ平遺跡，大
隅地方では姶良町小瀬戸遺跡，国分市妻山元遺跡，日向地方では宮崎学園都市遺跡から出土しており，流通圏（供給先）は南九州全域に及んでいたと考えられる。これらの供給地は古代における行政上の要地であり，地方官衙の存在が推定される地域である。これらの地方官衙（郡衙）と阿多地方の郡衙を治めた為政者との間に深い関わりがあったことが推定される。



第１回　中岳山麓古窯跡群の位置

写真１　窯体露出状

資料の所在

採集された遺物は，鹿児島国際大学に展示・保管されている。

参考文献

上村俊雄1984「鹿児島県荒平須恵器古窯趾群発見の意義とその問題点について」『古文化談叢』14
上村俊雄・坪根伸也1985「鹿児島県中岳山麓須恵器古窯跡群に関する一考察」『古文化談叢』15

（上村俊雄）